

松岡克尚(2016)「ソーシャルネットワークにおけるネットワーク概念とネットワーク・アプローチ」関西学院大学出版会

【目次】

第1章 多義的なネットワーク

第2章 コンピテンスおよび環境

第3章 ソーシャルワークにおける四つのネットワーク

【要約】

序章からのつながり

牧里毎治「社会福祉の実践活動にとって、ネットワークという用語、あるいはそれが指し示す概念というものは、あらゆる局面の実践活動において、とりわけ地域福祉において、その本質や固有性に迫り得るうえで有用になるものと注目されてきた」(牧里 1988)

他方、論者によってさまざまな捉え方がされてきたネットワークの意味と一人歩き

例) 単なる「つながり」「協力」「組織化」、あるいは「連携」

実践現場において、「雰囲気としての協力」ととらえられがちであり、その実態が見えないまま論じられる傾向があることが指摘されてきた(松原 1986)

※かなり限定した意味内容で使用されてきた側面もある(社会ネットワークなど)

→ソーシャルワークにおいてそれら異なる用い方の間に何らかの関連性があるのかどうか、それらを包摂した全体的なものがソーシャルワークに対してもつ意義は何なのか、およびその関連性を土台にして具体的にどのような介入方法が志向されているのか、という三つの点において曖昧さが残っていた。

朴容寛 組織論の観点からネットワークの分類

情報通信網のような物理的な存在である「道具的ネットワーク」と、それ以外の組織や人々のつながりを表すネットワークに大別し、後者については「戦略的ネットワーク」と「相互行為的ネットワーク」に分けている。自律的につながっている状態が「相互行為的ネットワーク」というものであるが、それに似たそうしたつながりのありかたを何らかの戦略の下で組織化したものを「戦略的ネットワーク」と称して、区別している(朴 2003:22-25)。

第一節 多義的なネットワーク

ネットワークの本質について

E.マッキンダイヤ「要素間の連結 (connectedness)」(McIntyre1986:421)

朴「一つの全体として了解される世界であり、その内の諸変化にもかかわらず、そのアイデンティティを維持し得るもの」(朴 2003:10)

→すべて「ネットワーク」の一語でもってそのものの概観の説明が可能になってくる。単なる現

象の上辺面ではなく、何らかの本質を指し示す用語ではないかという発想もまた引き出せる。(29)
コミュニティアケア研究者の M.ペインによるネットワークの四つの源流

①数学、特に L.オイラーに始まるグラフ理論

②社会学の分野における社会ネットワーク関連研究（社会心理学・集団力学研究や、社会人類学、あるいは「ハーバード構造主義学派」と呼ばれる M.グラノヴェッターらの研究）

③高齢者や精神障害者などの社会的ニーズを抱える人々に対する G.キャプランらの応用的な社会ネットワーク研究

④マネジメント論、特に組織内における対人関係構造の性差を扱ったフェミニスト的視点
(Paryne2000:10)

→ネットワークとは、ソーシャルワーカー・サービス利用者（クライアント）の二者関係からは直接的には見えてこない部分であり、かつそれは必ずしも公式化されたものではないがゆえにイメージされにくいという宿命をもつ。(30)

ネットワークというとき、そこに焦点となる個人（サービス利用者、専門職）、あるいは組織を置いているか、置いていないのかという点でも混乱がみられる。

成富正信は社会学におけるネットワーク分析には、大きく二つの方針が存在していることを指摘している。一つは特定集団内の特定個人から見た関係の広がり进行分析する立場であり、もう一つは構成員のすべての関係进行分析対象とする立場である。前者は「パーソナル・ネットワーク分析」、後者は「全体ネットワーク分析」（成富 1986）。

この分類に従って、焦点となるエゴ・行為主体を前提としたネットワークを「エゴ中心ネットワーク」、前提としない場合は「全体ネットワーク」と呼ぶことにする。(54)

「ネットワーキング」

一般的に利用者の支援ネットワーク、あるいはネットワークや組織間ネットワークの「構築・強化・調整」という意味合いで用いられることが多い。

例)「クライアントと家族、友人、近隣、組織などの間に結ばれている社会的紐帯を向上ないし発展させること」(Barker1995:253)、「社会福祉援助網展開法」(瓦井 1996)

対して、単なるネットワークづくりという意味でこの言葉を使うのではなく、そこに一種の思想性（「新しい社会」「もう一つの社会」づくり）を具備させている場合もある。こうした捉え方は、福祉運動やボランティア活動の分野の運動原理となっており、ネットワーキングは「関係のあり方・つながり方」（花立・森 1997:48）、あるいはそうした原理に基づく一種の「運動体」（播磨 1987）であると位置付けられている。

各種のネットワークが社会福祉実践に持ち込まれてこれだけの隆盛を見ているのは、従来の実践原理・方法とは異なる新たな志向性をこれらのネットワークという概念のなかに見いだすことができるからであるという指摘がされている（大橋 1993；牧里 1995）

しかし、ネットワークの氾濫期を迎えるに至った現状においては、曖昧なネットワークという用語の一語ですべてを説明すると一層の混乱を招きかねず、「交通整理」の時期に差し掛かっている。現状をこのまま放置すれば、牧里のいう「既存の枠組みを変える問題意識」の向上という目標は却って遠のいてしまいかねない。

第二節 コンピテンスおよび環境

C.ジャーメインの指摘「コンピテンスは、環境の、その変容と維持における性質(nature)に依存した生来の能力である」(Germain1991:25-6)

→コンピテンスとは環境との関係なくして一義的に規定されるものではない

「環境」という概念は極めて重要なタームであるが、必ずしも十分な定義がなされているわけではない。ソーシャルワークにおいては、環境の重要性についてはワーカーの行動で示されてきたというよりあくまで理念上のものにとどまっており、実際は「環境」に対する「個人」のほうへの介入に力点が置かれてきた経緯がある。あくまでも個人への介入が主であり、環境への働きかけはせいぜいそのための従属的な位置づけに実際的には近いところがあった。(38)

→理論レベルではシステム理論や生態学アプローチの導入によって、個人と環境を別個に扱うのではなく、その両者の間に生じる連続的な相互(交互)作用に焦点が置かれるようになっていく。

このように関係網の形に構造化された個人と環境の一体性のもとでは、コンピテンスとは、利用者の内的適応力(内的コンピテンス)に加えて、ネットワーク状につながった各種の関係を活用して必要な社会資源を調達していく力(外的コンピテンス)と捉えることができる。

マルシオーネのコンピテンスを構成する要素

「能力」「スキル」「動機的側面」「環境上の質」のうち最後の「環境上の質」については、社会ネットワークのような環境上の資源、サポート、環境からの要請、制度上の圧力とサポートを含ませている。そして、この「環境上の質」が利用者の精神内科医における資源よりもコンピテンスに与える影響が大きいことをマルシオーネは主張している(Malussio1981)。

つまり、質的に豊かな対人関係(ネットワーク)をもち、そこに利用者の生活課題に有用な各種の資源とサポートが豊富に存在すれば、それだけ利用者のコンピテンスが高まるという関係がそこから導き出される。(40)

ジャーメイン

①「サービス環境 service environment」:利用者およびその家族のコンピテンス、自尊心、関連性および自己志向性を最大限に維持・向上させることが可能になるような環境。

②「実践環境 work environment」:福祉サービス手協組織がそこに所属するソーシャルワーカーのコンピテンス、アイデンティティおよびソーシャルワーカーとしてのプライドを育てることができるような環境を意味する(Germain1984:255-6)。

後者の実践環境こそがサービス提供サイドのコンピテンスを左右するものとして位置づけているのである。すなわち、サービス利用者における「個人」「環境」の図式と同様に、ソーシャルワーカーら専門職(その所属する福祉サービス提供組織)にとっての環境もまた、それらのコンピテンスに大きな影響を与えている可能性があると思われ得る。

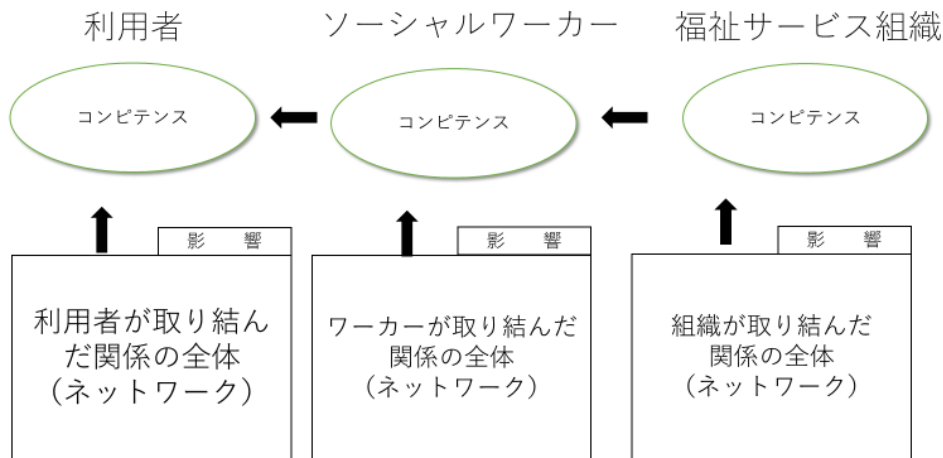


図1-1 コンピテンスとネットワークの関係(41)

第3節 ソーシャルワークにおける四つのネットワーク

1 サービス利用者のネットワーク

利用者のコンピテンスに影響を与えるような利用者自身が取り組んだ関係の全体、すなわち彼・彼女のネットワーク:「パーソナルネットワーク(牧里 1992)」「マイクロネットワーク(牧里 1993)」ソーシャルサポート・ネットワーク等の概念

→家族、近隣、友人などのインフォーマル・システムから提供される資源として一般的に位置付けられ、自己意識、勇気づけと正のフィードバック、③ストレスからの保護、④知識、技能、資源、⑤社会化の機会、という分類がなされる(Maguire1991xv-xix)

2 ソーシャルワーカーのネットワーク

特定専門職(ソーシャルワーカー)が中心となって織りなすパーソナル・ネットワーク(エゴ中心ネットワーク)の中でも、その構成メンバーが専門職(あるいは准専門職)に限定されたもの。

しかし、専門職ネットワークについては、これまでのソーシャルワーク研究の中では理論的にもあまり取り上げられることはなく、利用者サイドのソーシャルサポート・ネットワークと比較して研究成果はまだまだ乏しい現状

類似概念) チーム、あるいはチームワーク

R.バーカーによれば、ソーシャルワーク・チームとは特定の目標を達成するために多職種が統合的、調整的に活動するシステム。

ただし、チームというものは専門職ネットワークと異なって、特定の焦点となる個人(専門職)を想定しておらず、そこに所属するメンバー間の関係全体のあり方について言及した概念。チームやネットワークと専門職ネットワークは、概念的に区別しておかなければならない。

3 組織間ネットワーク

ソーシャルワーカーが所属する福祉サービス提供組織が保有する多組織との関係の総体。

焦点組織(あるいは特定のソーシャルワーカーが所属する組織)が中心になって織りなすエゴ中心ネットワークを意味している。

→分析のためには、組織社会学や経営学の分野で発展してきた組織間関係論を基本的枠組みに用いることが有益であると考えられている。このレベルのネットワークは、ソーシャルワーカーが属する福祉サービス提供組織のコンピテンスの源泉になり得ると仮説づけることができる。(46)

4 ネットワーキング

二つの異なる意味

①「ネットワーク構築」：エゴ中心ネットワーク

最終的に利用者などの「エゴ」のコンピテンスを強化、またはその維持を達成するという実践方法を意味する。

→それぞれの個別ネットワークが何等かの意味で課題を抱えている場合には、介入的、人為的にその解消が目指されることになる。(47)

R.M.ピント 精神障害者(利用者)のネットワークを取り上げて、そのサイズ、密接、相互性などの課題を介入しようとする専門的な実践を「ソーシャルネットワーク介入」と呼んだ(Pinto2006)。

加えて、ネットワークづくりという場合には、焦点となる行為主体をもたない(エゴなしの)ネットワークを人工的に構築していくという意味で使われることも多い。

→この意味での3つのタイプのネットワーキングについては、いずれともに特定主体の所有物という性格がないことに加えて(エゴなし)、構築されてきたネットワーキングそれ自体が一つの「塊」、あるいは「主体」として把握できるのであり、その意味では朴のいう「ネットワーク組織」という特徴を有していることになる。この点は3つのレベルのネットワークが朴のいう「ネットワーク関係」であり、「介入的なネットワーキング」がそれぞれ「ネットワーク関係」の修正、再編成を図ることを意味すると考えれば、ここにそれらとの決定的な相違点が存在している。(48)

→それぞれの同レベルのネットワーキングとそれと位相的に対応するネットワーク概念との間で、個別的に概念的混用を引き起こしてしまう背景になっている。

②「ネットワーク組織」

その延長線上にオルタナティブ性が志向されており、「もう一つの社会」作り、というニュアンスが込められている。

リプナック：ネットワーキングとは、異なる人々、グループ。組織が共通の目的に基づいて協働するために「つながる」ことを意味する(Lipnack&Stamps1982=1984)。

→そこでは旧来的組織の特徴である官僚制や階層性の打破が目指されており、個人、グループ、組織が既存の枠を超えて共通の目標達成に向けて緩やかにつながっていくプロセスが強調される。例)当事者運動、セルフヘルプグループ等の運動論的ネットワーキング。

「アソシエーティブ・ネットワーク」(牧里 1992 : 225)

ネットワーキングとは、それが「介入的なネットワーキング」あるいは「運動論的なネットワーク」であるかに関係なく、朴のいう「ネットワーク関係」をベースにした他の三つのタイプのネットワーク概念とは異なって、むしろ動能的側面に着目した点にその特徴を見いだせる。(51)

→しかし、ネットワーキングの「運動論的性格」が混入してしまい、実践現場においてある主の幻想「ネットワークでオルタナティブが実現できる」を惹起させてしまっている原因の一つになっていると思われる。ネットワークとネットワーキングは、実際の、実践的にはともかくとしても、概念的には厳密に区別されなければならない。

【ディスカッション】

※以下は参加者の発言・見解の備忘録であり、精査されたものではありません。研究会の総意ではありません。

自分の研究や実践に役立つと思ったこと

- ・この章ではソーシャルワークの範疇でネットワーク概念を分類するための、ソーシャルワーク独自の視点からの整理を試みようとしており、松岡の指摘する、この研究分野における「交通整理」を行う必要性は非常に納得できた。
- ・コンピテンスとネットワークの関係図(図 1-1)は示唆的である。
- ・根本的な部分で地域福祉とネットワークとは親和性のある議論であることを再認識。
→牧里毎治「社会福祉の実践活動にとって、ネットワークという用語、あるいはそれが指し示す概念というものは、あらゆる局面の実践活動において、とりわけ地域福祉において、その本質や固有性に迫り得るうえで有用になるものと注目されてきた」(牧里 1988)
- ・自身の研究対象である「社会福祉専門職による支援を拒否する住民」への援助展開におけるネットワークの視点からの分析はマッチするかどうかという不安が常にあるが、松岡が本書で紹介したように、(例えば杉野昭博は障害者運動の分析にあたってネットワークの用語を用いている)、さまざまな分野の研究者がネットワーク研究に取り組んできたことがわかり、新規性としても取り組む価値はありそう。

※リサーチクエスチョン：社会福祉専門職の展開する支援を拒否する住民の援助に、ネットワーク概念がどのような影響をもたらしているか

- ・牧里、田中を批判してソーシャルワークにおけるネットワーク概念の精緻化の必要性(交通整理の時期に差し掛かっている)を指摘していること。
- ・松岡の類型化を参照することで、ネットワークという言葉をもどのレベルで使用するのかを位置づけることができる(=実践者・観察者が見えていないレベルを認識することができる)。特に「ネットワーキング」について「ネットワーク構築」と「運動論的なネットワーキング」を区別した点は基本的なことであるだけに重要である。(→課題も参照)
- ・運動論的なネットワーキングの定義では、同質性のつながりや機能が見えなくなる可能性がある(ex. 田中)
- ・本書のようにしっかりとレビューをしてくれている文献は研究上貴重。

課題及び疑問点

- ・利用者、専門職、組織間の3種のネットワーク類型は、3節の“利用者のコンピテンス”に基礎づけられている。エゴ中心ネットワークが基礎であり、全体ネットワークにアプローチする

- (ex. 予防的社会福祉において地域を対象とした実践) 足場を見だしにくい可能性がある。
- ・地域福祉は地域社会の変革を志向してきた(社会運動論的な性格)。「ネットワーキング」の概念上の2区分についての主張はもっともであるが、その結果「運動論的なネットワーキング」が排除されるようだと地域福祉論が積み重ねてきた問題構成とは齟齬が生じる可能性が高い。実践だけでなく研究においても厳密に区分して使用することが可能かどうか。(「ネットワーク構築」のみを論じようとしても、社会運動論的な価値が不可分に含まれてしまうのではないか)
 - ・田中(2001)が指摘する「ネットワークの機能的解釈だけでは不十分」のとおり、ネットワーク分析は、ネットワーク(関係)のなかの「意味」を重視することができないのではないか。
 - ・図1-1 コンピテンスとネットワークの関係図は、[組織のコンピテンスがワーカーのコンピテンスに影響を与え、ワーカーのコンピテンスが利用者のコンピテンスに影響を与える]こと自体は確かだが、地域福祉の視点からはベクトルが一方向性にまとめられる点に違和感も覚える。
 - ・奥川幸子は“ソーシャルワーカーは組織からはみ出たマージナルマンである”とした。組織からはみ出してネットワークをつくるソーシャルワーカーのあるべき姿のイメージは外してはいけない。
 - ・全体ネットワークは概念として雑ではないか。支援の対象があってこそその理論・実践となる社会福祉にとっては有用性に疑問を感じる。
 - ・全体ネットワークとエゴ中心ネットワークの分類は社会的ネットワーク研究の用語。朴(2003)を参照し、ネットワーク構築と運動論的なネットワーク(ネットワーク組織)を分類・整理したのは松岡の仕事。
 - ・社会的ネットワーク研究はサンプルを必要とするが、2000年前後からネットワーク研究が量的に拡大する中ではオンラインの大規模なサンプルを扱う研究が増えていると認識している。一人の人間がどんなパスを持っているのかを放射状に描くとエゴ中心で、一つのコミュニティとかなのつながり状況を全体として図を描くと全体ネットワークということになる。
 - ・ソーシャルキャピタルの概念は、つながりのうえに信頼や助け合いがのっている。調査で人々のつながりの量を調べて、多いとソーシャルキャピタルが多いと。本当か。どうやってできたのか説明していない。
 - ・特に地域支援では結果・成果の可視化が課題となってきた経緯がある。結果が見えにくい。ソーシャルキャピタルはネットワークの生成を説明しないかもしれないが、やったことの足跡を測ることを考えると、ネットワークは活用可能ではないか。
 - ・サロンの意義・効果として参加者のつながりを調べる。どのくらい増えたか計測する。一つの取り組みに際し、ワーカーが開発したネットワークを計測して見えるようにする。そういう意味で分析ツールとしては使える。地域の取り組みは関係性から立ち上がるので、ネットワーク分析の手法は使ってみたい。
 - ・運動論的なネットワークは、これがリプナックとともに議論された80・90年代の在宅福祉の環境を考えると水平で対等、権力や階層性から自由という性格を与えられた「ネットワーク」という言葉に明るい希望がもたれていたと思う。現在は介護保険のケアマネジメントのシステムに定型化・制度化され、ガチガチになってしまっているなのでこのあたりでもう一度運動論的

なネットワークに光を当てても良いのかもしれない。

- 松岡が取り上げているネットワーク研究・科学では、階層性やつながりの質はあまり焦点化されていないと思う。というかつながりの質は計量的なネットワーク研究の枠組みでは扱いにくい。